総合科学部

極限状況で作業 九月中旬に報告書刊行を予定

総合科学部自己点検・評価委員会
委員長
江口正晃

平成三年七月大学設置基準の改正が行われ、自己点検が努力義務として規定されたのを受けて、平成四年五月に広島大学自己点検・評価委員会が設置された。これとともに、六月にはわが総合科学部の自己点検・評価委員会も発足することとなった。

平成四年度には十六回にわたって委員会を開き、

①総合科学部自己点検・評価委員会の性格・役割を上記特別委員会の答申の線に沿ったものとすることとし、総合科学部の自己点検・評価は学部の教育研究の改善に資するものでなければならないことを確認した

②点検を行う場合、全学規程に述べられている項目ごとに、どのような細目を立てるか、また点検を行うにあたって、どのような視点で臨むべきか

③平成四年度総合科学部自己点検報告書の作成の方針

④自己点検報告書の作成については作業委員会をおいて作成にあたる

等について議論を重ねた。とくに①の項目については、委員会での議論の土俵を決めることでもあるので、慎重に、十分時間をかけて話し合いを行った。

委員会での報告書作成の基本方針にしたがって、田村和之委員を作業委員会委員長に選んで報告書作成にとりかかることになったが、多くの状況的困難に囲まれてのスタートとなった。三百二十五名の教職員、三八〇〇余の学生の大移動であった総合科学部の西条キャンパスへの移転、残りの二七〇〇名の学生を東千田キャンパスにおいて教育をしなければならないという二重開講の対策、入試センター試験・二度にわたる入学試験・大学院の入学試験、卒業論文の発表会など、学期末の多くの行事も同時に進めなければならなかった二月、三月。そしてあわただしい動きをみせた二月の学長選挙、四月には新キャンパスでの学生の受け入れの準備、舗装されていないために雨が降るとどろんこになる通路の対策、講義棟へ持ち込まれるどろや弁当がらの対策などの作業をこなしながら委員会での仕事をしなければならなかった。私自身は春休み中これらの仕事にかかりっきりであったし、五月の連休はすべて全学の白書作成に費やさねばならなかった。今になって考えると、全員が本当に極限の状態であったといっても過言ではないだろう。発刊が当初の予定から大幅に遅れたけれど、ようやく七月十五日には印刷業者の入札というところまでこぎつけた。

上で述べたような困難な事情があったにもかかわらず、委員諸子の献身的努力の結果、「総合科学部自己点検・評価報告書」が九月の中旬には冊子となって出来上がってくることになっている。まったく感無量である。自画自賛であるとお叱りをうけるに違いないが、委員長としては本当に良いものが出来たと自負している。私たちは、多くの問題点をはらみながらも生き生きと活動を続ける総合科学部の姿が浮かび上がって欲しい、との思いも込めながら編集に当たってきた。新しい人事で総合科学部に赴任してこられるであろう未来の同僚達にはぜひこれを読んで来て頂きたいものだと思う。

総合科学部創設にあたっては最終的には全学の合意が得られたものの、設立までの過程で大きな困難を抱えた歴史や、あの不幸な事件もあって、本学部では、言葉にこそ「自己点検・評価」と呼ばれなかったけれども、他学部に比べて早くから「自己点検・評価」は行われてきたと私は思う。しかし、今回のように報告書の形式で出すのは初めてのことであり、学部の全般の問題にわたって短期間のうちに形あるものとしなければならなかったことは、道のないところに道をつけながら、の感もあって容易なことではなかった。ただ、私自身が全学の白書作りの作業も同時に行ってきた関係上、暗中模索であったとは言え、そこでの経験がいろいろと役に立ったことはまちがいなく、このことにもふれておかなくてはならない。

今回の報告書は現状報告の域を大きくは出ていないが、いたるところに改善すべき問題点が読み取れるものと思う。自己点検・評価委員会設置の目的にもあるように、この報告書が教育・研究の改善に役立つものとなることを祈る次第である。